

宝地房証真撰 「三大部私記」の研究 (三)

台門研究会

顕本 (下)

『玄義私記』卷七 (仏全二一、二八三頁下～二八九頁下)

四、破異義

四破異義者、略出三義。

第一説云、新成之仏亦顕遠本。謂入一仏法界海中、前仏後仏、体皆同。故新仏亦説久遠本也。垂迹雖異、実本一故。寿量疏云、寄無始無終・無近無遠、顕法身常住、有始有終・有近有遠、論其応迹^云。今文約応迹故

云不必頭本等。

四に異義を破すとは、略して三義を出す。

第一の説に云く、新成の仏、亦、遠本を頭す、と。謂く一仏法界海中に入れば、前仏後仏、体皆同なり。故に新仏、亦、久遠の本を説くなり。垂迹は異なりと雖も、実本は一なるが故に。寿量の疏に云く、無始無終・無近無遠に寄せて法身常住を頭し、有始有終・有近有遠もて其の応迹を論ず、と云。今の文は応迹に約するが故に必ずしも頭本せず等と云う。

(1) 第一の説 証真は新成不頭本の立場から、以下に三種の異義(①法身為本、②本覺仏、③本門別明・無作三身)を取り上げて批判している。ここでは、その第一として法身を本とする説を破している。

(2) 寿量の疏 『法華文句』卷九下。大正三四・一二七頁中下。この記述のみに基づけば、法身を本とする解釈も可能となるが、天台教学では寿量品の正意を報身とするのが基本である。証真は基本説に依拠しつつ、この記述が実は吉蔵の『法華玄論』卷二(大正三四・三七八頁上)の文を引用したものであることを指摘し、天台の本義ではないと述べている。既出。

難云、此是今文体用本迹、法身為本、諸經常説。法身平等非頭本義。又約法身是他師義。大師常破。方便記

云、世人不見而但以法身為本。何教無之。壽量記云、法身非壽諸教常談。但未曾說久成遠壽。又云、他人不見今經本迹。但知從勝專求法身。如此法本與衆經共。勝翻成劣。若得久本則近迹不失。若但云法身則尚失中間。況復遠本。^じ若云會入本有報身故不同他法身義者、本有報身即是法身。合彼性三為一法身故。今約修成以論報仏。故經云本行菩薩道、久修業所得。論云報仏菩提十地滿足。如經我実成仏已來等。今文亦立本因・本果等。若云只入一仏智海故說久者、此即他師平等意趣。即同慈恩墮妙樂破。五百問破云、釈迦曾成仏。不可一切皆作平等意趣說。此久成屬事故也。若指仏身為平等者、亦未成等応云心・仏・衆生三無差別方名平等。^じ又若如所言、釈迦亦是新成而約平等明久成耶。又若入法界諸仏体同、不可更有久近之別。何故文云長短不同。壽量品記云、又言、何仏不然。此亦不爾。久近不同長短別故。然疏約法身者、是引嘉祥。已如上弁。

難じて云く、此れは是れ、今の文は体用本迹¹にして、法身を本と為すは、諸經に常に説く。法身平等は顯本の義にあらず。又、法身に約するは是れ他師の義なり。大師常に破す。方便の記²に云く、世人見ずして、但、法身を以て本と為す。何の教か之れ無からん、と。壽量の記³に云く、法身非壽は諸教常に談ず。但、未だ曾て久成の遠壽を説かず、と。又云く、他人は今經の本迹を見ず。但、勝に従つて専ら法身を求むるを知る。此の如き法、本と衆經と共なり。勝翻て劣と成る。若し久本を得れば、則ち近迹失せず。若し但、法身と云わば、則ち尚中間を失す。況や復、遠本をや、と。^じ若し本有の報身に會入するが故に他の法身の義に同せずと云わば、本有の報身は即ち是れ法身なり。彼の性三を合して一法身と為すが故に。今、修成に約して

以て報仏を論ず。故に經(6)に本行菩薩道、久修業所得と云う。論(6)に報仏菩提十地満足と云う。經(7)の我実成仏已來等の如し。今の文亦、本因・本果等(8)を立つ。若し只、一仏智海に入るが故に久を説くと云わば、此れ即ち他師の平等意趣(9)なり。即ち慈恩に同じて妙樂の破に墮す。五百問(10)に破して云く、釈迦曾て成仏す。一切皆、平等意趣を作して説くべからず。此の久成、事に属するが故なり。若し仏身を指して平等と為さば、亦、未成等、応に心・仏・衆生三無差別を方に平等と名づくこと云うべし、と。又若し所言の如くんば、釈迦亦是れ新成にして、平等に約すれば久成を明かすや。又若し法界に入りて諸仏体同なれば、更に久近の別有るべからず。何故に文(11)に長短不同と云うや。寿命品の記(12)に云く、又言く、何の仏か然らざらん。此れ亦、爾らず。久近不同にして長短別なるが故に、と。然るに疏に法身に約するは、是れ嘉祥を引く。已に上に弁ずるが如し。

(1) 体用本述 『法華玄義』卷七上。大正三三・七六四頁中く七六五頁上。「本門十妙」の冒頭では、本迹を六義(理事・理教・教行・体用・実権・今已)によって解説している。体用本迹はその第四番目に相当する。すなわち、「四約体用明本迹者、由昔最初修行契理、証於法身為本。初得法身本、故即体起。応身之用、由於応身得顯法身。本迹雖殊不思議一。文云、吾從成佛已來甚大久遠若斯。但以方便教化衆生。作如此說。」と述べられ、『法華經』如來寿命品(大正九・四二頁下)の文を根拠に、法身を体、応身を用という観点から本迹が論じられている。既出。

(2) 方便の記 『法華文句記』卷四上。大正三四・二一八頁中下。

(3) 寿量の記 『法華文句記』卷九中。大正三四・三二八頁中。既出。

(4) 又 『法華文句記』卷九下。大正三四・三三二頁上。

(5) 經 「本行菩薩道」の句は『法華經』如来寿量品(大正九・四二頁下)、「久修業所得」の句は『同』如来寿量品(大正九・四三頁下)に基づく。

(6) 論 『法華論』卷下(大正二六・九頁中)の略抄。応仏・報仏・法仏の三種仏菩提を述べる中、報仏菩提を解説する箇所に該当する。既出。

(7) 經 『法華經』如来寿量品。大正九・四二頁中。

(8) 本因・本果等 『法華玄義』卷七上。大正三三・七六五頁上。 「本門十妙」では、本因妙・本果妙・本国土妙・本感応妙・本神通妙・本說法妙・本眷属妙・本涅槃妙・本壽命妙・本利益妙の十義が取り上げられている。ここでは、本因妙・本果妙を指していると考えられる。

(9) 他師の平等意趣 ここでの他師とは慈恩大師基のことである。基は『法華玄贊』卷七末(大正三四・七九〇頁下)で、「問。釈迦修行不越三祇。何故塵劫極多。彼時猶稱王子。答。意趣有四。一平等意趣。謂仏説言、我於爾時曾名勝觀。法身平等故。二別時意趣。謂願生極樂皆得往生。暫聞無垢月光仏名、定於菩提得不退転。三別義意趣。謂説諸法皆無自性無生滅等本来涅槃。四衆生意樂意趣。謂於一善根或讚或毀令増進故。今此依於平等意趣説余仏事。即是我身、身平等故。」と述べ、四意趣すなわち平等意趣・別時意趣・別義意趣・衆生意樂意趣に言及し、平等意趣に依拠して法身と他身が平等であると解釈している。

(10) 五百問 『五百問論』卷下。続藏二一五・三九二丁左上。『五百問論』は、湛然が慈恩大師基の『法華玄贊』を批判した書とされているが、古來疑義が呈されている。すなわち、源信は『答日本国師二十七問』、『四明尊者教行録』卷四所収、大正四六・八八九頁下)で、二十七問。五百問論題下、云「妙樂大師造」。疑者云、此論似多訛謬。且挙一二。如言阿難羅雲、論中不挙供養仏数。及破他師所釈種性等七地義、似歡喜喜等十地。若是大師所製、不可不通。と述べ、誤謬が多いことを理由に湛然撰述を疑っている。この疑義に対し、知礼は「答。此論宋地闕本。茲不得而評論矣。」と回答し、欠本であるため評論できないとしている。本書については、日比宣正『唐代天台学序説』第三編・第二章(山喜房佛書林、一九六六)、吳鴻燕『法華五百問論』を介して見た湛然教学の研究(『駒澤大学大学院仏教学研究會年報』三六、二〇〇三)等、参照。なお、この箇所は、『法華玄贊』卷九末(大正三四・八二九頁上)の「如是等隱密名言解之令異。此中秘密即是第三对除秘密。由輕仏徳及貪慢行者、説他仏身以為自体。称讚仏故。如下経言。於此中間説燃燈仏等。」という記述に対して反論したものであり、平等という観点から他の仏身を自体とする点を批判していると考えられる。

(11) 文 例えば、『法華文句』卷九下(大正三四・一二九頁上)に、「一身即是三身、不不一異。當レ知、一仏身即具諸身壽命功德。隨縁感見長短不同。」と説かれている。

(12) 寿量品の記 『法華文句記』卷九下。大正三四・三三三頁中。既出。

問。分別品疏云、一念信解者、信一切法皆是佛法。乃豁然開悟通達三諦。記云、聞於長遠開通無礙、信一切法皆是佛法。又信如來化功長遠。是人能知本迹妙理是仏本証。若但只信事中遠壽、何能令此諸菩薩等增道損生至於極位が。準此故知、以理為本。非事成本。

答。久証極理故名遠壽。誰云但是事劫數耶。信久成極理故名一念信。而是久証故是報身。既指修成。非本有理。故亦名事成。故不可同法身為本無近遠也。記第十云、若信長遠、信必依理。理与迹中妙理不殊。但指在久本、功歸実証。理深時遠。故云甚深が。故不可廢事時遠也。

問う。分別品の疏〔1〕に云く、一念信解とは、一切法は皆是れ仏法なりと信ず。乃豁然として開悟し三諦に通達す、と。記〔2〕に云く、長遠を聞きて無礙を開通し、一切法は皆是れ仏法なりと信ず。又、如來の化の功、長遠なりと信ず。是の人能く本迹の妙理は是れ仏の本証と知る。若し但只、事中の遠壽を信ぜば、何ぞ能く此の諸の菩薩等をして増道損生〔3〕し極位に至らしめん、とが。此に準じて故に知んぬ、理を以て本と為して、事成は本にあらざることを。

答う。久証の極理の故に遠壽と名く。誰か但是れ事の劫數と云わんや。久成の極理を信ずるが故に一念信と名く。而も是れ久証の故に是れ報身なり。既に修成を指す。本有の理にあらず。故に亦、事成と名く。故に法身を本と為し近遠無きに同ずべからざるなり。記の第十〔4〕に云く、若し長遠を信ずれば、信は必ず理に依る。理は迹中の妙理と殊ならず。但指すこと久本に在つて、功は実証に帰す。理深く時遠し。故に甚深と云う、とが。故に事の時遠を廢すべからざるなり。

(1) 分別品の疏 『法華文句』卷一〇上(大正三四・一三七頁中下)の略抄。ここは、『法華經』分別功德品(大正九・四四頁下)の「爾時、佛告彌勒菩薩摩訶薩。阿逸多、其有衆生、聞弘壽命長遠如是。乃至能生一念信解。所得功德無有限量。……」という文中の「一念信解」を釈した箇所である。

(2) 記 『法華文句記』卷一〇上。大正三四・三四二頁中下。

(3) 増道損生 智慧を増進させ、無明を断ずることを言う。『法華文句』卷一〇上(大正三四・一三六頁下)には、「今本門増道損生皆約四位_二解_一。下八世界発心者、六根清淨人、初入十信位也。……得無生忍入十住位也。……得聞持陀羅尼入十行位也。得樂説弁才入十廻向位也。得無量旋陀羅尼入初地也。得不退入二地也。得清淨入三地也。八生入四地也。七生入五地也。六生入六地也。五生入七地也。四生入八地也。三生入九地也。二生入十地也。一生入等覺金剛心。……但約智徳論増、約断徳論損。約法身論生、約無明論滅。或可一人一時有八番増_{イ増}。或可一世、或八世、或無量世、或可一念、或可八念、或無量念、或可衆微塵數人亦如是。」とあり、『法華經』分別功德品の冒頭箇所(大正九・四四頁上)を増道損生と関連づけて論述している。ここで注意すべきは、本門の法華では田教の行位に基づいて増道損生を解釈すると説明している点である。同趣旨のことは、『法華玄義』卷五下(大正三三・七四一頁上中)にも見出され、ここでは「初住乃至等覺更増道損生者、此以証為乘。從因縁三界、乃至無後三界中出到妙覺中。」と述べられていることから、増道損生が初住以上の行位において議論されていたことが推察される。また、先の『法華文句』では、一時・一念に八番増損する旨が記され

ているが、このことについて、円珍が『法華論記』卷九末（仏全二五・二九三頁上〜二九五頁下）で「又案、此中有超越者。」と評釈している点も注目される。円珍の問題については、浅井円道『上古日本天台本門思想史』（平樂寺書店、一九七三。五九六頁〜五九七頁）参照。

(4) 記の第十 『法華文句記』卷一〇中。大正三四・三四四頁中。

問。弘決第二約法華名三徳云、本即法身、迹即解脱、本迹不二即是般若。じ

答。彼約体用明本迹也。初証法身名実成。故証法身者、即是報仏。不同他師本有法身。若不爾者、即違諸文。

問う。弘決の第二に法華に約して三徳を明かして云く、本は即ち法身、迹は即ち解脱、本迹不二は即ち是れ般若なり、と。じ

答う。彼は体用に約して本迹を明かすなり。初て法身を証するを実成と名く。故に証法身とは、即ち是れ報仏なり。他師の本有法身には同ぜず。若し爾らずんば、即ち諸文に違す。

(1) 弘決の第二 『止観輔行伝弘決』卷二之五。大正四六・二一六頁中。なお、証真は『止観私記』卷二末（仏全二二・三一九頁上下）でも、「本即法身等者、問。法身為_レ本、諸文所_レ破。何作_二此解_一。答。若論_二実成_一、正是報身。今約_二体用_一故云_二法身_一。謂久成時、亦以_二法身_一為_レ本故也。」と述べ、体用本迹という立

場において法身を本とすることを認めつつ、実成は報身であると明言している。

問。後唐院記云、本初は寿量義。以師子奮迅之力、於十方界說成道事。過去常・現在常・未來常、皆迹中事。非本仏事也。自証境界無有長短・久近之相。八葉諸尊隨機取土。而中台不動本際。汝仏新成我仏久成等者、皆是戲論而非仏法。当知、華嚴・法華所説、皆戲論也。久近在機、都非在仏云。此以法身為久遠也。

答。彼明真言教中大日為本、諸尊為迹。其大日者、即是内証法身・自受故、約法身亡其長短。既尚極理故亡事成。如記云欲以法身亡其長短。故不必同法華久成。故彼文云華嚴・法華皆戲論也。既云法華戲論。故知、法華以事成為本也。

問う。後唐院の記①に云く、本初は是れ寿量の義なり②。師子奮迅の力を以て、十方界に於いて成道の事を説く。過去常・現在常・未來常なるは皆、迹中の事にして本仏の事にあらざるなり。自証の境界には長短・久近の相有ること無し。八葉諸尊は機に随つて土を取れども中台は本際を動ぜず。汝が仏は新成、我が仏は久成等とは、皆是れ戲論にして仏法にあらざり。当に知るべし、華嚴・法華の所説は、皆戲論なることを。久近は機に在りて、都て仏に在るにあらざり云。此れ法身を以て久遠と為すなり。

答う。彼は真言教の中の大日を本と為し、諸尊を迹と為すことを明かす③。其の大日とは、即ち是れ内証法身・自受の故に、法身に約して其の長短を亡ず。既に極理を尚ぶが故に事成を亡ず。記④に法身を以て其の長短

を亡げんと欲すと云うが如し。故に必ずしも法華の久成に同ぜず。故に彼の文に華嚴・法華は皆戲論なりと云う。既に法華は戲論なりと云う。故に知んぬ、法華は事成を以て本と為すことを。

(1) 後唐院の記 後唐院、すなわち円珍の記ということであるが、未詳である。浅井円道氏は、『上古日本天台本門思想史』(平楽寺書店、一九七三。三八四頁)でこの記述に言及し、日蓮の『富士殿御書』(定遺・一三三七)所引の「円珍智証大師云、華嚴・法華望大日經、為作戲論。……」という文との類似性を指摘しているが、これに相当する著作は現存しないとされている。

(2) 本初は是れ寿量の義なり この文は、『大日經義釈』卷九(続天全、密教1・四四六頁下。『大日經疏』卷一二、大正三九・七〇九頁中)に見出され、円密一致を立論するための重要な文の一つとして取り上げられる場合がある。例えば、円珍の『些些疑文』卷下(仏全二七・一〇五九頁上)には、「下転字輪品釈云、本初は寿量義。若爾、与法華寿量品所説久成同歟。為復除彼更有本地不。若許同者、釈迦与大日平等一体性否。与海雲記不相違耶。」とあり、この文に基づいて、本初(大日如来)が寿量品の久成と同じか否か、更にもし同じであるならば釈迦と大日如来は同体であるか否かという疑義が提示されている。近似する内容は、『同』卷下(仏全二七・一〇六二頁上)にも説かれている。因みに、円珍撰とされる『大日經指帰』(大正五八・一六頁下)では、「寿量長遠、已与今一。……彼久成本地、即此法界心地。是彼非此、貴耳賤目也。」の如く、円密一致の観点から久成と大日如来が一体であることが論じられている。

(3) 彼は真言教の中の大日を本と為し、諸尊を迹と為すことを明かす 『大日經義釈』(『大日經疏』)

には、本迹二義を用いて解釈しているところが散見される。例えば、『大日経義釈』卷三（統天全、密教1・八五頁下）八六頁上。『大日経疏』卷三、大正三九・六一一頁中）には、「又今普現隨類身、而言悉現如来身者、明本迹俱不思議加持不二。豈欲令独一法界作種種形耶。行者如解時、觀毘盧遮那与鬼畜等尊、其心平等無勝劣之想。輒從一門而入皆見心王。」とあり、本迹不二という立場から大日如来と鬼畜等の諸尊が平等であることが明示されている。また、『義釈』卷五（統天全、密教1・一六六頁上。『疏』卷六、大正三九・六四三頁下）の「所以垂普門之迹、皆為頭本。本者、即是如来自証之地住大涅槃。若捨加持神力、則一切心量衆生非其境界。」という記述から、垂迹するのは頭本のためであることも了解できる。さらに、このような理解を可能にする根拠としては、『義釈』卷三（統天全、密教1・八三頁上。『疏』卷三、大正三九・六一〇頁中）で、「若自本垂迹、則從中胎一門、各流出第一重種種門。從第一重一門、各流出第二重種種門。從第二重一門、各流出第三重種種門。若行因至果、則第三重之所引撰成就、能通第二重。第二重之所引撰成就、能通第一重。第一重之所引撰成就、能見中胎藏。」と述べられる如く、「自本垂迹」と「行因至果」という曼荼羅解釈が存立していることが推測される。

(4) 記 『法華文句記』卷九中。大正三四・三二九頁上。既出。

問。若大日本不同法華、何故大日経疏云大日本初是寿量義。

答。法華正以久証報身為本。真言正以法身為本。不要久近。雖少不同、而理是同。故云是也。若一向廢事久

成者、則違金剛頂疏。云、遮那經云、我昔坐道場降伏於四魔。故知、成仏甚大久遠。所以不説所經劫數者、於經各有傍正義故。彼法華經正破近執故広説劫。今經正顯頓証。故広説現証、略説久成。故大興善寺阿闍梨云、法華久成、是此經毘盧。不可異解。此文 彼疏則以事成久遠同大日也。

問う。若し大日の本、法華と同ぜずんば、何が故に大日經疏一に大日の本初は是れ壽量の義なりと云うや。

答う。法華は正しく久証の報身を以て本と為す。眞言は正しく法身を以て本と為す。久近を要せず。少しく不同なりと雖も、而も理是れ同なり。故に是と云うなり。若し一向に事の久成を廢せば、則ち金剛頂疏に違す。云く、遮那經二に云く、我れ昔道場に坐して四魔を降伏す、と。故に知んぬ、成仏すること甚だ大にして久遠なることを。經る所の劫數を説かざる所以は、經に於いて各々傍正の義有るが故なり。彼の法華經は正しく近執を破すが故に広く劫を説く。今經は正しく頓証を顯す。故に広く現証を説き、略して久成を説く。故に大興善寺の阿闍梨云く、法華の久成、是れ此の經の毘盧なり。異解すべからず、と。此文 彼の疏は則ち事成の久遠を以て大日に同ずるなり。

(1) 大日經疏 『大日經義積』卷九。続天全、密教1・四四六頁下。『大日經疏』卷一二、大正三九・七〇九頁中。既出。

(2) 云く 『金剛頂經疏』卷三。大正六一・三九頁中。この文は、『金剛頂一切如来眞実撰大乘現証大教王經』卷上(大正一八・二〇八頁中)の「不久現証」を註釈した箇所の一部であり、「大興善寺阿闍梨云」と

して、法華久遠仏と大日如来の同一性が明示されていることから、古来円密一致を論証する上で尊重されている。この大興善寺の阿闍梨については、元政に比定されるのが通例であるが、証真の『天台真言二宗同異章』（大正七四・四一八頁上）では「法全云」と記載されている。因みに、安然是『教時問答』卷二（大正七五・四〇三頁下）で、空海の十住心教判に五種の過失があることを主張する中、第五「違衆師説失」でこの記述を略抄して援引している。また、同じく安然の『教時諍』（大正七五・三五五頁下）には、「大勇金剛阿闍梨云、法界宮中本来自覺摩訶毘盧遮那如来、是為一切修因向果如来。……」とあり、大勇金剛、すなわち円仁が大日如来を修因向果の如来と位置づけていたことが窺われ、『金剛頂経疏』の文との対応関係が注目される。なお、証真は『天台真言二宗同異章』（大正七四・四二二頁下）において、「問。真言教云、法界宮中本来自覺大日如来本覺法身遠離因果。天台云、久遠実成、修因得果。寧是同耶。答。若約事論、真言亦云修因得果。故金剛頂経云、不_レ久頓成。大日経云、我昔坐_レ道場。……若約_レ理論、天台亦云無始無終等_云。」と問答し、大日如来が修因得果の仏であることを事という観点から容認している。

(3) 遮那經 『大日経』卷二。大正一八・九頁中。

問。入大乘論云、無相法身隨順有相示現色身。或現入宮、或現出家、或現初成仏、或現久成仏。乃至 応化衆生法身常在。如法華寿量所明。又云、法身常住色身心現。乃至 如集一切福德三昧経中説。寿示正法、終不説仏入於涅槃。如法華説常在靈鷲山及余諸住处、凡愚無知者雖在而不見。略抄 準此論文、法華本門明法身常。

答。但以三世常住名法身。非謂遠成是法身故。故以色身名現久成仏。故知、久成是事成也。彼法身者、摠指内証法・報功德。故以目連不窮仏声等、亦為法身。又云諸仏色身欲界成正覺。菩薩法身住於淨居云々。

問う。入大乘論〔1〕に云く、無相法身は有相に隨順して色身を示現す。或は宮に入るを現じ、或は出家を現じ、或は初成の仏を現じ、或は久成の仏を現す。乃キ 応化の衆生、法身常に在り。法華の寿命に明す所の如し、と。又云く、法身常住にして色身応現す。乃キ 集一切福德三昧經〔3〕の中に説くが如し。寿は正法を示し、終に仏涅槃に入るを説かず。法華〔1〕に、常に靈鷲山、及び余の諸住処に在り、凡愚無知者は、在りと雖も見ずと説くが如し、と。略抄 此の論文に準ずるに、法華本門に法身常を明かす。

答う。但、三世常住を以て法身と名く。遠成は是れ法身なりと謂うにはあらざるが故に。故に色身を以て久成の仏を現すと名く。故に知んぬ、久成は是れ事成なることを。彼の法身は、摠じて内証の法・報の功德を指す。故に目連不窮仏声等〔5〕を以て、亦、法身と為す。又云く、諸仏の色身、欲界に正覺を成ず。菩薩の法身、淨居に住す、と云々。

(1) 入大乘論 『入大乘論』卷下(大正三二・四七頁中下)の略抄。

(2) 又 『入大乘論』卷下。大正三二・四八頁下。

(3) 集一切福德三昧經 『入大乘論』の原文では、この經典の引用部分が經典名の前か後か、どちらに該当するのかわきらずしも判然としていない。因みに、宇井伯壽『宝性論研究』第四章・第四(岩波書店、一九

五九)には、『入大乘論』の著者及び訳者の解説と併せて内容の梗概が略説され、いくつかの引用經典について出拠が示されている。そこでは、この經典の引用部分を經典名の後と捉えている。註釈に際しては、この宇井説を参照した。但し、典拠への言及までは為されていない。その他、勝呂信静「インドにおける法華經の注釈的解釈」(金倉円照編『法華經の成立と展開』所収。平樂寺書店、一九七〇)にも『入大乘論』への論及があるが、内容は宇井説をほぼそのまま踏襲している。なお、『集一切福德三昧經』という經典は、鳩摩羅什訳三卷として現存しているが、類似する記述を見出すことはできない。また、「壽示正法……」という箇所は、『入大乘論』の原文では「喜樂正法……」となっている。

(4) 法華 「常在靈鷲山、及余諸住处」の偈文は、『法華經』如来寿量品(大正九・四三頁下)に同文が見出せる。しかしながら、後半の偈文については、対応箇所が不明である。近似する表現として、『同』如来寿量品(大正九・四三頁中)の「令顛倒衆生、雖近而不見」という偈文が挙げられる。

(5) 目連不窮仏声等 『入大乘論』卷下(大正三二・四九頁上)の「又如来密藏中説、持速疾菩薩、觀如来頂上至無量諸仏世界、猶不能見。如目連尋如来説法音声、乃至野馬世界、猶不能尽於仏音声」という記述を指していると考えられる。「如来密藏(經)」については未詳であるが、宇井伯壽『宝性論研究』(四二二頁)では、この箇所を『大宝積經』卷一〇、密迹金剛力士会第三之三(大正一一・五六頁下)であると指摘している。

(6) 又 『入大乘論』卷下。大正三二・四八頁下。但し、「諸仏色身、欲界成正覚」は、原文では「諸仏色身、於欲界而成正覚」となっている。

第二説云、以本覚仏名為久本。言本覚者、本初不生、本来自覚。大日如来迹為釈迦、即指本覚名遠寿也。故疏云寄無始無終跏趺法身常住。他経及迹門雖談円融、未明本来自覚如来。本門始談故異諸経。故大日疏云、今此本地之身、又是妙法蓮華最深秘密処。又云、釈尊久遠寿量皆在衆生一念心中。弥勒菩薩迹居補処、於此事中亦所不達。疏文 故知、自覚大日は釈迦遠寿也。云 難云、此義大謬。今開為四。一破本覚為本。二破有自覚仏。三破他経・迹門不明本覚。四破引大日疏為証。

第二の説①に云く、本覚仏を以て名づけて久本と為す。本覚と言うは、本初の不生、本来の自覚なり。大日如来の迹を釈迦と為す。即ち本覚を指して遠寿と名づくるなり。故に疏②に云く、無始無終に寄せて法身常住を顕す、と。他経及び迹門に円融を談ずと雖も、未だ本来自覚の如来を明かさず。本門に始めて談ずるが故に諸経に異なるなり。故に大日の疏③に云く、今、此の本地の身は、又、是れ妙法蓮華の最深秘密処なり、と。又云く、釈尊の久遠寿量は皆衆生の一念の心中に在り。弥勒菩薩の迹、補処に居す。此の事中に於いて亦、達せざるところなり、と。疏文 故に知んぬ、自覚の大日は是れ釈迦の遠寿なることを云。難じて云く、此の義大謬なり。今開して四と為す。一には本覚を本と為すことを破す。二には自覚仏有ることを破す。三には他経・迹門に本覚を明かさざることを破す。四には大日疏を引きて証と為すことを破す。

(1) 第二の説 破異義の第二。証真は、本覚仏を久本とする説について、以下に四種の点(①破本覚為レ本、②破有ニ自觉仏、③破他経・迹門不レ明本覚、④破下引大日疏ニ為レ証)を挙げて批判している。

(2) 疏 『法華文句』卷九下(大正三四・一二七頁中)に、「寄無始無終・無近無遠ニ頭ニ法身常住。」とある。既出。

(3) 大日の疏 『大日経義釈』卷五。統天全、密教1・二〇二頁上。既出。

(4) 又 『大日経義釈』卷三(統天全、密教1・九〇頁上)に、「復次衆生一念心中有如来寿量長遠之身・寂光海会。乃至不退諸菩薩、亦復不レ能レ知。当知、此法倍復難レ信。故法華中補処三請、如来四誠、然後演説。」とある。

初破本覚名本者、

一者違経。経云我本行菩薩道、久修業所得、我実成仏已来等、皆明修因感果。二者違譬。若本覚者何譬五百塵点劫耶。三者違論。論以我実成仏已来為報仏菩提。十地満足得常涅槃。非本覚也。四違玄文本因・本果等。若是本覚非因・非果。豈論十妙。又云若最初始成無久本可顕。若約本覚誰無本耶。又云若久此者即以四方為譬。若都無者則無所譬。若指本覚何論久近。何譬不同。五違有義。玄文明新仏有顕本義。但作三義、都無此義。六違妙樂記云但指過去報寿為長。又云事成久近不可同也。又云久成屬事。七断仏寿。若新成仏指本覚

理為顯本者、釈迦亦是新成而指本覺為久本耶。若云釈迦是本来自覺仏者、則違諸文。如向所引。又本覺者則是性徳。豈指衆生理性為仏本壽耶。

初に本覺を本と名づくることを破すとは、

一には經に違す。經⁽¹⁾に、我本行菩薩道、久修業所得、我実成仏已來等と云うは、皆、修因感果を明かす。二には譬えに違す⁽²⁾。若し本覺ならば、何ぞ五百塵点劫に譬えんや。三には論に違す。論⁽³⁾に、我実成仏已來を以て、報仏の菩提と為す。十地満足して常涅槃を得。本覺に非ざるなり。四には玄文の本因・本果等に違す。若し是れ本覺ならば、非因・非果なり。豈に十妙を論ぜん。又云く、若し最初の始成ならば、久本として顯すべき無し、と。若し本覺に約さば、誰れか本無からんや。又云く、若し此れより久しければ、即ち四方を以て譬とす。乃⁽⁴⁾若し都て無くんば、則ち譬とする所無し、と。若し本覺を指さば、何ぞ久近を論ぜん。何の譬か不同ならん。五には有義に違す。玄文に新仏に本を顯す義有るを明かすに、但、三義を作して、都て此の義無し。六には妙樂の記⁽⁵⁾に、但、過去の報壽を指して長と為す、と云うに違す。又云く、事成は久近同ずべからず、と。又云く、久成は事に属す、と云⁽⁶⁾。七に仏壽を断ず。若し新成の仏、本覺の理を指して顯本と為さば、釈迦も亦、是れ新成にして本覺を指して久本と為すや。若し釈迦は是れ本来自覺の仏なりと云わば、則ち諸文に違す。向に引く所の如し。又、本覺とは則ち是れ性徳なり。豈に衆生の理性を指して仏の本壽と為すや。

(1) 經 『法華經』如來壽量品。大正九・四二頁下〜四三頁下。「我本行菩薩道」と「我実成仏已來」は長行、「久修業所得」は偈文である。

(2) 譬えに違す ここでは、五百塵点劫の釈迦を本覺に譬えることを非難している。この五百塵点劫の釈迦と本覺を結びつける説は、中古天台の教説に見られる。伝忠尋『法華略義見聞』卷下・「十重顕本事」(仏全一六・八四頁上〜八五頁下)には、「五百塵点者、此表事也。本地無作三身開顕畢、一切衆生悉本覺本有三身也。此時五重煩惱頓破故、五百塵点名立、有真実時節五百塵点不可意得。故疏云、五百塵点表五住煩惱矣。鈍根機只聞五百塵点事成、利根人五百塵点当体本地三身可意也。」と、五百塵点を実際の時間ではなく五住の煩惱とし、さらに五百塵点の当体が本地の三身とする。また続けて、「尋云、經文相事成五百塵点也。有何故、又有理成仏可云耶。」という問の中、本地三身は經文に出てこないという難について三義をもつて答えている。その第二義として、「本地本覺真説非別物。五百塵点事成当体即本覺真意也。」と説いている。また、伝源信『枕草紙』(『三十四箇事書』・「理開三身」(惠全三・四八七頁〜四八八頁。日本思想体系『天台本覺論』一六三頁)には、「仏本門壽量、説久遠成道、皆仮施設也。其実如來藏理、本自不説論成不成、無始中後差別。何論久遠与今日。雖然為利益衆生、為令起信心、説五百塵点也。若為他機不同。相応彼者、可説五百六百乃至百千万。皆仮設也。故本門成道云仮説也。」と、衆生に信心を起こさせる為に仮設として五百塵点の成道を説いたとしている。

(3) 論 『法華論』卷下。大正二六・九頁中。応仏・報仏・法仏の三仏の菩提の示現を説く中、第二義として「二者示現報仏菩提。十地行満足得常涅槃証故。如經善男子我実成仏已來無量無辺百千万億那由

他劫故。」とある。既出。なお、円珍の『法華論記』卷八末（仏全二五・二六二頁上〜二六三頁上）には、報
仏菩提を解釈して「報仏菩提、是本十妙中第二本果妙。」と、この後に問題となる本果妙との関係についての
指摘がある。

(4) 玄文 『法華玄義』卷七下（大正三三・七六五頁上中）に説く本門十妙の中、本因妙・本果妙のこ
と。この中、本因妙は「本因妙者、本初發菩提心、行菩薩道所修因也。」とあり、發心修行を修すると
ころの因とし、また、本果妙については「但取成仏已來甚大久遠初証之果名本果妙也。」とあり、初証の
果を本果妙とする。既出。

(5) 又 『法華玄義』卷七下。大正三三・七六九頁下。既出。

(6) 又 『法華玄義』卷七下。大正三三・七六九頁下〜七七〇頁上。既出。

(7) 玄文 『法華玄義』卷七下。大正三三・七六九頁下〜七七〇頁上。三義とは、①初住為本、②体用
・教行、③延足劫智のこと。延足劫智については、「二、引文証」の註（前号二二頁）参照。

(8) 妙案の記 『法華文句記』卷九中。大正三四・三二八頁中。既出。

(9) 又 『法華文句記』卷九中（大正三四・三二九頁上）の「又欲顯於諸仏道同、其實開三同レ仏。
事成久近不可レ同也。」による。既出。

(10) 又 『五百問論』（続藏二一五・三九二丁左上）に、「法華已前釈迦牟尼已曾成仏。是故不可レ一切
皆作平等意趣以説レ此。久成屬レ事故也。」とある。既出。

次破本来自覺仏者、

学真言人多作是言。然尋文理都是妄說。其本覺者只指妄法即是真性。非離妄外別有真法。若別有者則違文理。一者違經。蓮華三昧經云、歸命本覺真法身。常住妙法心蓮台、本來莊嚴三身德。三十七尊住心城、普門塵數諸三昧、無辺德海本円滿。遠離因果法然具。還我頂礼心諸仏。^{〔五〕}此同天台性德三身。妙樂云、一念凡心已有理性三密相海^云。即是諸經円門理具。既云心中本有三身。即是理性法身万德。

二者違論。起信論云、阿梨耶識有二種義。能攝一切法生一切法。一者本覺義。二者不覺義。所言覺義者、謂心体離念、離念相者等虚空界無処不遍、法界一相。即是如來平等法身。依此法身說名本覺。何以故。本覺義者対始覺義說。以始覺者、即同本覺。始覺者依本覺故、而有不覺。(依不覺)故說有始覺。又以覺心源故名究竟覺。^{〔六〕}既指衆生心体名為本覺。非別有仏。又依本覺有不覺。故是在纏也。

三者違宗。一家諸文何処判云有自覺仏。若有本来自覺仏者、古昔先仏応從彼仏。故疏第一云、仏仏相望は無窮。妙樂則云最初無教・内熏自悟、不云本覺。

四者違名。既云本覺理。何有本覺事仏。若云本覺仏是理仏者、理即法身・在纏真如。非出纏仏。若本覺仏是出纏者、即是修因成果。非自覺也。若是本覺非事理者、事理之外更有何法。即是戲論非真談也。

五者違理。若有本来自覺仏者、則無因有果同外道說。若云十界皆本有故、仏界亦本有者、性德十界名為本有。非事十界名常住也。

六者違教。諸經論中都無此說。真言教中亦無此文。金剛頂經但云現証不明本成。大日經中亦云現成、不云本

覺。大乘經論皆云内証無始・無終・無生滅等。非本門意。問。秘教經云我一切本初、又云自覺本初⁴⁴。此是本来自覺仏也。答。歸本有理故曰本初。本有仏性名爲自覺。

次に本来自覺¹仏を破すとは、

真言を学ぶ人多く是の言を作す。然るに文理を尋ぬるに都て是れ妄説なり。其の本覺は、只、妄法即ち是れ真性なるを指す。妄を離れて外に別に真法有るに非ず。若し別に有らば則ち文理に違す。

一には經に違す。蓮華三昧經²に云く、本覺真法身に歸命す。常に妙法の心蓮台に住して、本来三身の徳を莊嚴す。三十七尊、心城に住す。普門塵教諸三昧と、無辺の徳海は、本と円満す。因果を遠離して法として然も具す。還て我が心の諸仏を頂礼す、と。⁴⁵此れ天台の性徳の三身に同じ。妙樂³の云く、一念の凡心に已に理性の三密の相海有り、と⁴⁶。即ち是れ諸經の円門の理具なり。既に心中の本有の三身と云う。即ち是れ理性法身の万徳なり。

二には論に違す。起信論⁴に云く、阿梨耶識に二種の義有り。能く一切の法を攝し一切の法を生ず。一は本覺の義。二は不覺の義なり。言う所の覺義とは、謂く心体の念を離れ、離念相とは虚空界に等しくして処として遍ぜざるは無く、法界は一相なり。即ち是れ如来平等の法身なり。此の法身に依りて説いて本覺と名づく。何を以ての故に。本覺の義は始覺の義に対して説く。始覺を以てするは、即ち本覺に同じ。始覺は本覺に依るが故に、而して不覺有り。(不覺に依るが⁵)故に始覺有りと説く。又、心源を覺るを以ての故に究竟覺と名づく、と。⁴⁷既に衆生の心体を指して名づけて本覺と爲す。別に仏有るに非ず。又、本覺に依りて不

覚有り。故に是れ在纏なり。

三には宗に違す。一家の諸文、何処に判じて自覚の仏有りと云うや。若し本来自覚仏あらば、古昔の先仏、
応に彼の仏に従うべし。故に疏の第一⁽⁶⁾に云く、仏仏相望するに是れ無窮なり、と。妙樂⁽⁷⁾は則ち最初無教・
内熏自悟と云い、本覚と云わず。

四には名に違す。既に本覚の理と云う。何ぞ本覚の事仏有らんや。若し本覚仏は是れ理仏なりと云わば、理
即の法身・在纏真如⁽⁸⁾なり。出纏の仏に非ず。若し本覚の仏は是れ出纏ならば、即ち是れ因を修して果を成ず
る。自覚に非ざるなり。若し是れ本覚は事理に非ずんば、事理の外に更に何の法か有らん。即ち是れ戲論に
して真談に非ざるなり。

五には理に違す。若し本来自覚仏有らば、則ち無因有果にして外道の説⁽⁹⁾に同じ。若し十界は皆、本有なる
が故に、仏界も亦、本有なりと云わば、性徳の十界を名づけて本有と為す。事の十界を常住と名づくるには
非ざるなり。

六には教に違す。諸の経論の中に都て此の説無し。真言教の中に、亦、此の文無し。金剛頂経⁽¹⁰⁾には但、現
証と云い、本成を明かさず。大日経⁽¹¹⁾の中には、亦、現成と云い、本覚と云わず。大乘の経論に皆⁽¹²⁾内に無
始・無終・無生滅等を証すと云う。本門の意には非らず。問う。秘教の経⁽¹³⁾に云く、我一切本初、と。又⁽¹⁴⁾
云く、自覚本初、と云。此れは是れ本来自覚仏なり。答う。本有の理に帰するが故に本初と曰う。本有の仏
性を名づけて自覚と為す。

(1) 本来自覚仏 「本来自覚」ということについては、安然が円仁（大勇金剛）の教示に基づいて「本来自覚大日如来」に言及している。『教時諍』（大正七五・三五五頁下）では、「天竺一仏応化不同」を四門に分け、その第一・仏身不同について説く中、「十云、是毘盧舍如来法門之身。如大日經云、毘盧那如来者以下現釈迦牟尼生身眷屬ぶ。大勇金剛阿闍梨云、法界宮中本来自覺摩訶毘盧那如来、是為一切修因向果如来。所証無処。若至此處更無差別。為有機緣、說一說異而已ぶ。不空金剛阿闍梨云、若是本覺乃無報身、報從滿立是聖教ぶ。」と記している。また、『教時問答』卷一（大正七五・三七六頁下）では、「大勇金剛云、生界仏界二俱本有。涅槃界中、本来常有自然覺了之仏。故大日經、大日説云、我一切本初也。」と議論し、会釈を加えている。このように、安然是密教での解釈として「本来自覚大日如来」を説く。なお、『教時問答』卷二（大正七五・四〇五頁上）にも、「今真言教、無始無終本来自覺大日如来、以三世仏合為一仏。」と見られる。

(2) 蓮華三昧經 『妙法蓮華三昧秘密三摩耶經』（続藏一―三・四〇九丁右。以下『蓮華三昧經』とする）に、「歸命本覺心法身。常住妙法心蓮台。本來具足三身徳、三十七尊住心城。普門塵教諸三昧、遠離因果法然具。無辺徳海本円満。還我頂礼心諸仏。」とある。この偈は、伝良源『本覺讚』（惠全五・四六三頁）により本覺讚として知られる偈である。しかし、証真の引用とは、第三偈の「莊嚴」と「具足」が異なり、また、第六句と第七句が入れ替わった形になっている。『蓮華三昧經』として初めて用いたのは、安然であると思われる。安然是その著作の中で度々『蓮華三昧經』としてこの偈を引用しているが、その形は一定していない。不完全な形のものとしては、『教時諍』（大正七五・三五五頁下〜三五六頁上）に、「歸命

本覚心法身 常住妙法心蓮台 本来具足三身徳 三十七尊住心城 遠離因果法然具 無辺徳海本円満 還我頂礼心諸仏」とあり、また、『教時問答』巻二（大正七五・三九七頁上）に、「帰命本覚心法身 常住妙法心蓮台 本来莊嚴三身徳 三十七尊住心城 遠離因果法然具 普門塵数諸三昧 無遍徳海本円満」とある。八句からなっているのが、『教時問答』巻一（大正七五・三八四頁下）の「帰命本覚心法身 常住妙法心蓮台 本来莊嚴三身徳 三十七尊住心城 普門塵数諸三昧 遠離因果法然具 無辺徳海本円満 還我頂礼心諸仏」と、『菩提心義抄』巻四（大正七五・五二四頁下〜五二五頁上）の「若大蓮華三昧経云、帰命本覚心法身 常住妙法心蓮台 本来莊嚴三身徳 三十七尊住心城 遠離因果法然具 普門塵数諸三昧 無辺徳海本円満 還我頂礼心諸仏」である。安然の引用を見ると、第三句目は「本来莊嚴」となっていることが多く、証真の引用も「本来具足」ではなく、「本来莊嚴」となっている。証真引用における偈の配列は、『蓮華三昧経』・『教時問答』・『菩提心義抄』の全てと異なる。なお、『蓮華三昧経』の初出文献としてしばしば指摘されてきたのが、伝円珍『講演法華儀』巻上（仏全二七・九一四頁下）である。しかし、本書の真撰説については、従来疑問視されている。『講演法華儀』の引用を見ると、偈の配列は『蓮華三昧経』と同じであり、また、第三句については、安然・証真の引用と同じく「莊嚴」となっている。『蓮華三昧経』に関する諸問題については、後出の参考文献一覧を参照。

(3) 妙楽 『法華玄義釈籤』巻一四。大正三三・九一九頁下。この文は、『十不二門』として別項されている。その中、第八・三業不二門を説く中に、「故一念凡心已有 理性三密相海。一塵報色同在 本理毘盧羅遮那。方乃名為三無差別。」とあり、一念の凡心や一塵の報色といったものが理性三密・本理毘盧遮那とい

つた理にあることが説かれている。仁岳『十不二門文心解』（続藏二一五・九九丁右下）には、「理性三密者如来藏、云一切衆生貪恚癡中有如来身。」と、理性三密を如来藏と解釈する。処謙『十不二門顯妙』（続藏二一五・一〇八丁左上）では、「三密相海・妙性遮那並指下凡。心色本具乃合。經文三無差別。是知、無差妙旨須符念性。色心不二妙境可觀。故本文云、一切諸法中悉有安樂性。記至云、結束開意。以諸法中有妙理故、方可論開点示衆生及三乘人本有覺藏、心仏衆生三無差別^甲。既云諸法、豈非九界色心耶。有安樂性、豈非遮那妙境耶。今依妙解直示斯旨、令成初心円觀体相用、此觀察見遮那性^レ果無^レ別。故輔行云、心造一切三無差別。」と、唯心思想の観点から三密相海・妙性遮那と衆生の一念心との無差別を説く。

(4) 起信論 真諦訳『大乘起信論』（大正三三・五七六頁中）の引用。すなわち、「心生滅者、依如来藏故有生滅心。所謂、不生不滅与生滅和合、非一非異。名為阿梨耶識。此識有二種義、能攝一切法生一切法。云何為二。一者覺義、二者不覺義。所言覺義者謂心体離念。離念相者等虚空界無所不遍、法界一相、即是如来平等法身。依此法身説名本覺。何以故。本覺義者对始覺義説、以始覺者即同本覺。始覺義者依本覺故而有不覺、依不覺故説有始覺。又以覺心源故名究竟覺、不覺心源故非究竟覺。」とある。

(5) 不覺に依る 底本にはない。天台大師全集本及び版本により補う。

(6) 疏の第一 『法華文句』卷一上（大正三四・二頁下）に、「久遠行菩薩道時、宣揚先仏法華經。亦有三分上中下語。亦有本迹。但仏仏相望、是則無窮。別取最初成仏時所説法華三分上中下語、專名

為_レ上、名_レ之為_レ本。何以故。最初成仏初説_レ法故、為_レ上為_レ本。此意可_レ知。」とある。

(7) 妙樂 『法華文句記』卷一中(大正三四・一五八頁上)に、「問。若許_レ有_レ最初無教、何須_レ稟_レ今
仏之教_二。答。無教之時則内熏自悟。」と最初無教の時には内熏によつて自ら悟ると説く。この内熏自悟を巡
つては源信と知礼の間で問答があつたことが知られる。『答日本国師二十七問』(『四明尊者教行録』卷四所
収。大正四六・八八八頁上中)には、「十五問。妙記第一決_二釈最初無教仏_二云、終有_一一仏、在_レ初無_レ教_二。
疑者云、義猶未_レ了。若許_レ無教有_レ仏、墮_レ無因過。若言_レ稟_レ教、墮_レ無窮過。願聞_一一揆矣。答。最初一仏
雖_レ無_レ稟_レ教之因、而有_レ内熏自悟之因」。記中示_レ之甚明。何言_レ墮_レ無因耶。」とあり、源信が無教有_レ仏を認
めれば無因の過に墮すのではないかという問いに対して、知礼は最初無教であつても内熏自悟を因として成
仏したと論ずる。すなわち無因有果ではないと解釈する。源信のこのような考えは、『觀經頭要記破文』(惠
全一・四四〇頁〜四四一頁)にも見られる。ここでは、源清の「不可_レ推_レ求最初之仏、則墮_レ無窮之過」
という説に対して、「此文難_レ測。為_レ許_レ無教自悟仏、為_レ不_レ許耶。若不_レ許、其難_レ如上。墮_レ無因過。無教
自悟、即無因故。」と、無教自悟には無因の過があると論難する。また、証真も『法華疏私記』卷一(仏全二
一・三九四頁上下)で内熏自悟について論じている。証真自身の見解は、湛然のこの問答は仮説であるとい
うものであり、その証拠として「慈覺大師己心中義記亦云、疏記問答是仮説問答。一往破_レ他定無_レ单理熏故
断惑作仏_二。」と述べる。続けて、先の知礼や源清『觀經頭要記』(佚本)、『十不二門示珠指』に見られる
内熏自悟を認める説について、「若許_レ有_レ最初、爾時則仏少衆生多。又未_レ自悟、前但有_レ衆生、心無_レ仏界。
又若有_レ内熏者、一切衆生皆同有理。如何一悟余不_レ悟耶。又必由_レ外縁有_レ内熏発。豈但内熏方成仏耶。」

と論じ、内熏自悟を認めない立場をとっている。なお、『十不二門示珠指』巻上（統蔵二一五・五六丁右下、左下）では、『観経顕要記破文』所引の源清の説を確認することができる。

(8) 在纏真如 『勝鬘經』（大正一二・二二二頁中）に、「若於無量煩惱藏所纏如来藏不疑惑者、於_レ出無量煩惱藏法身亦無疑惑。」とある。基『法華玄贊』巻二末（大正三四・六八二頁中）では、これを受けて「二出所知障名為法身。勝鬘云在纏名如来藏。出纏名法身。在二乘等不名法身非功德法所依止故。」と、在纏真如を如来藏、出纏真如を法身をする。また、知礼『観音經玄義記』巻四（大正三四・九一八頁下）では、「靈智者始覺也。法身者本覺也。」と言ひ、「二只此下明理智不二」。初約「出纏明不二。前云靈智合法身者、非二物合。只此靈智體是法身。以本覺不覺是故在纏、名如来藏。本覺自覺是故出纏、名大法身。今既出纏驗智即理。」（大正三四・九一九頁上）と述べる。一方、子璿『金剛經纂要刊定記』巻二（大正三三・一八七頁中）には、「在纏名本覺、出纏名究竟覺。」とある。

(9) 外道の説 無因有果を説く外道の説については、『提婆菩薩釈楞伽經中外道小乘涅槃論』（大正三二・一五六頁下）に二十種の外道を説く中、「十六者無因論師。」とある。また、吉藏『三論玄義』（大正四五・一頁中）には、「所_レ言摧_二外道者。…総論西域九十六術。別序宗要則四執盛行。一計邪因邪果。二執無因有果。三立_二有因無果。四辨_二無因無果。」とある。

(10) 金剛頂經 『金剛頂一切如来真實撰大乘現証大教王經』（大正一八・二〇七頁上）の如く、経題中に「現証」とある。

(11) 大日經 『大日經』中に「現成」の語は見られない。「現証」であれば、『大日經』巻五（大正一八

・三一頁中)に、「仏子汝今現証毘盧遮那世尊平等身語意故。」とある。また、施護訳『仏説一切如来真實禰大乘現証三昧大教王經』卷一(大正一八・三四一頁中)には、「現成正等覺」とある。

(12) 皆 底本では「昔」となっているが、天台大師全集本及び版本によつて改めた。

(13) 秘教の經 『大日經』卷三(大正一八・二二頁中)の「我一切本初、号名世所依」。説法無等比、本寂無有上。」という偈による。

(14) 又 『瑜祇經』卷上(大正一八・二五四頁上)に、「於本有金剛界自在大三昧耶自覺本初大菩提心普賢滿月不壞金剛光明心殿中、……」とある。

三破他經及迹門等不明本覺故本門理異迹門者、

若云有自覺仏名本覺者。非但諸經及迹門不説。亦本門中都無此説。如向已述。若以性徳名本覺者、別教尚明本有仏性。況諸經及迹門中無此理耶。豈以此理名本門耶。或云本迹二門明理有異。迹門実相横遍十界。未論豎互三世。本門実相豎互三際、即指過去常住名爲顯本也。

三に他經及び迹門等に本覺を明かさざるが故に本門の理、迹門に異なるを破すとは、

若し自覺仏有りて本覺と名づくると云わば、但、諸經及び迹門に説かざるのみに非ず。亦、本門中にも都て此の説無し。向に已に述べるが如し。若し性徳を以て本覺と名づくれば、別教すら尚、本有の仏性を明かす。

況や諸經の円及び迹門中に此の理無からんや。豈に此の理を以て本門と名づくるや。或が云く、本迹二門に理を明かすに異り有り。迹門の実相は横に十界に遍するも、未だ堅に三世に互ることを論ぜず。本門の実相は、堅に三際に互れば、即ち過去常住を指して名づけて蹟本と為すなり、と。

弾曰、此有多難。

一者実相法身横遍法界、堅互三世何処妙理但横但堅。方便品云、諸法從本来常自寂滅相。玄文第一斥三教云、非仏証得本有常住、不与方便品同。寿量品云、非如非異。不如三界見於三界。玄文釈云、不遍一切処不与寿量品同。

二者円融三諦名為妙法。除此円理更以何法為本門妙。玄文一部但以近遠分本迹殊。本迹雖殊不思議一。籤云、本迹証不殊。是故皆云不思議一。

三者疏云、発迹蹟本三如来者、永異諸經。所言異者、謂久証也。^{己上}若異迹門有本三身者、何故但云久証為異、不明別有本地三身。

四者本門十妙但云久近為異、不明理異。且如判龜妙中云。迹中若待龜妙、若開龜妙、此妙不異本妙。而言始得、始得為龜。本中先成、若龜若妙、若開龜妙、亦不異迹妙。而是先得。先得稱妙。又迹中事理始得為龜、本中事理先得為妙。迹中理教・教行・体用・權実等亦如是。^{己上}若理異者何不明理異以判龜妙耶。

五者籤一云、蹟本為事円、開權為理円。又云、円詮之初等者、且從迹説、具存応云本迹詮初。^{己上}迹門明理

本門談事。本理同迹故不云理也。

六者籤一云、本中体等与迹不殊。又云本迹二体其理不殊。レ若理異者、応有二体。

七者玄文第一明經体中、引寿命品、同方便品実相。籤云、所以但引寿命不引他部者、他部以与迹実相同。然下文云本門与諸經一向異、恐人疑云、若意異者、体等応殊。故今引之令知不異。所言異者、所謂遠寿。諸經永無。故一向異。若爾本門亦有実相同辺。何故不名有同有異。答。迹門正意在顕実相。故以所顕之理与諸部文弁同異。本門正意顕寿長遠。長遠永異故。故用比之。実相雖在迹門弁竟、今須弁同。故今但取実相同辺。長寿只是証体之用。未是親証実相体也。レ明判如此。不可異論。

八者記十云、若信長遠信必依理。理与迹中妙理不殊。但指久本、功帰実証。理深時遠、故云深遠。レ九者若二門理異者、何故本門不別立於境・智二妙、但云因果等耶。

十者止観妙境是法華理。何不別明本門妙理。但観迹門実相而已。籤一云、彼文妙観独在於円。

弾じて曰く、此れ多難有り。

一には実相法身、横に法界に遍じ、豎に三世に互る。何れの処の妙理か但横但豎ならん。方便品(1)に云く、諸法従本来、常自寂滅相、と。玄文の第一(2)に三教を斥けて云く、仏の証得の本有常住に非ずんば、方便品と同じからず、と。寿命品(3)に云く、如に非ず、異に非ず。三界の三界を見る如くならず、と。玄文の釈(3)に云く、一切処に遍ねかざれば、寿命品と同じからず、と。

二には円融三諦を名づけて妙法と為す。此の円理を除いて、更に何の法を以て本門の妙と為さん。玄文の一部(3)

は、但、近遠を以て本迹の殊を分つ。本迹殊なりと雖も不思議一なり。籤⁽⁶⁾に云く、本迹の証殊ならず。是の故に皆不思議一と云う、と。

三には疏⁽⁷⁾に云く、発迹顕本の三如来とは、永く諸経に異なる。言う所の異とは、謂く久証なり、と。若し迹門に異なりて本の三身有らば、何の故に但、久証を異と為すと云いて、別に本地の三身の有ることを明かさざるや。

四には本門の十妙⁽⁸⁾は、但、久近を異と為すと云い、理異を明かさず。且く僂妙を判ずる中に云うが如し。迹中の若しは僂に待する妙、若しは僂を開する妙、此の妙は本妙に異ならず。而して始得と言わば、始得を僂と為す。本の中に先に成ずる、若しは僂、若しは妙、若しは僂を開する妙も、亦、迹の妙に異ならず。而して是れ先得なり。先得を妙と称す。又、迹の中の事理、始めて得るを僂と為し、本の中の事理の先より得るを妙と為す。迹の中の理教・教行・体用・権実等も亦、是くの如し、と。若し理異ならば、何ぞ理異なるを明かして以て僂妙を判ぜざるや。

五には籤の⁽¹⁰⁾一に云く、顕本を事円と為し、開権を理円と為す、と。又云く、円詮之初等とは、且く迹に従つて説く。具さに存せば応に本迹の詮初と云うべし、と。迹門には理を明かし本門は事を談ず。本の理は迹に同ずるが故に理と云わざるなり。

六には籤の⁽¹²⁾一に云く、本の中の体等と迹と殊ならず、と。又云く、本迹の二体、其の理殊ならず、と。若し理異ならば、応に二体有るべし。

七には玄文の第一⁽¹⁴⁾に經体を明かす中に、寿量品を引いて、方便品の実相とせず、と。籤⁽¹⁵⁾に云く、但、寿

量を引いて他部を引かざる所以は、他部は迹の実相と同じきを以てなり。然るに下の文に本門と諸経と一向に異なると云わば、恐くは人疑いて云く、若し意⁽¹⁶⁾異なれば、体等応に殊なるべし、と。故に今之れを引きて不異を知らしむ。言う所の異とは、所謂遠寿なり。諸経に永く無し。故に一向に異なる。若し爾らば本門も亦、実相同の辺有り。何が故に有同有異と名づけざるや。答う。迹門の正意は実相を顕すに在り。故に所顕の理と諸部の文とを以て同異を弁ず。本門の正意は寿の長遠を顕す。長遠永く異なるが故に。故に用て之れに比す。実相は迹門に在りて弁じ竟ると雖も、今須く同を弁ずべし。故に今但、実相同の辺を取る。長寿は只だ是れ証体の用なり。未だ是れ親ら実相の体を証せざるなり、と。⁽¹⁷⁾明かに判ずること此くの如し。異論すべからず。

八には記の⁽¹⁸⁾十に云く、若し長遠を信ずれば、信は必ず理に依る。理は迹の中の妙理とは殊ならず。但、久本を指して、功は実証に帰す。理深く、時遠し。故に深遠と云う、と。⁽¹⁹⁾九には若し二門の理異ならば、何が故に本門に別に境・智の二妙を立てず、但、因果等と云う⁽²⁰⁾や。十には止観の妙境は是れ法華の理なり。何ぞ別に本門の妙理を明かさずして、但、迹門の実相のみを観ずるや。籤の⁽²¹⁾一に云く、彼の文の妙観、独り円に在り、と。

(1) 方便品 『法華経』方便品。大正九・八頁中。既出。

(2) 玄文の第一 『法華玄義』卷一上。大正三三・六八二頁下。

(3) 寿量品 『法華経』如来寿量品。大正九・四二頁下。既出。

(4) 玄文の釈 『法華玄義』卷一上。大正三三・六八二頁下。

(5) 玄文の一部 『法華玄義』にこのままの文はない。「本迹雖殊不思議一也」は智顛の著作中、本迹を語る際にしばしば用いられる。『法華玄義』卷一五(大正三三・七六四頁中)では、本迹を六義(理事・理教・教行・体用・実権・今已)から説くが、この六義の結論は「本迹雖殊不思議一也」である。特に四義・五義には、「四約・体用・明・本迹者、由昔最初修行契理、証於法身、為本。初得法身本、故即体。起・応身之用、由於応身得・顯法身。本迹雖殊不思議一。文云、吾從成仏、已來甚大久遠若斯。但以方便教化衆生。作如此説。五約・実権・明・本迹者、実者最初久遠実得法・応二身。皆名為本。中間數數唱・生・唱・滅・種種權・施法・応二身。故名為迹。非初得法・応之本、則無中間法・応之迹。由迹・顯本。本迹雖殊不思議一也。文云。是我方便諸仏亦然。」とある。四義は、体用の観点から久遠を法身・体、近成を応身・用と捉え、五義では、久遠実成の時に法身・応身を得ていたことを本とし、後に種種に法・応の二身を権施したことを迹とする。そしてこれらの本迹は不思議一であるとしている。証真は、このあたりの説を受けて「以近遠分本迹殊。」と述べたとと思われる。

(6) 籤 『法華玄義積籤』卷一五。大正三三・九二五頁中。但し、現行の『法華玄義積籤』では、「本迹証殊」とあり、『法華玄義』の「本迹雖殊」と矛盾する。証真は「本迹証不殊」と「不」を入れて読んでいる。これについて、慧澄癡空『法華玄義積籤講義』卷七(天台大師全集『法華玄義』卷四・五〇一頁)では、「証下、旧本有^レ不^レ字^レ為^レ是^レト。謂^レ所証^レ法体無^レ別。」と注記している。

(7) 疏 『法華文句』卷九下。大正三四・一二八頁中。原文は、「発迹顯本三如来者、永異諸經。論云、

示現成大菩提無上_二故、示三種菩提。一応化菩提。随_レ所_二応現_一即為示現。如_二經出釈氏宮_一故。二報仏菩提。十地満足得_二常涅槃_一。如_二經我実成仏已來無量無辺劫_一故。三法仏菩提。謂如来藏性淨涅槃不_レ変。如_二經如来如実知見三界之相_一故。經具_二其義論出其名_一。とある。本文中の「所言異者、謂久証也」は、『法華文句』中には見られないことから、この言は証真の見解であると思われる。ここでは、『法華経』には三如来という語はないが義はあるのであり、その名を記しているのが『法華論』卷下（大正二六・九頁中。既出）であると言う。これについて、『法華文句記』卷九下（大正三四・三三〇頁下）には、「法華下明_二本迹_一也。先正示_二同異_一。爾前非_レ不明_二円三仏_一。但与_二法華迹門義_一同、非_二今品之三如来_一也。故云永異。問。論中但指_レ報為_二久遠_一。応指_二伽耶、法非_二今昔_一。如何三仏悉指_二於本_一。答。論雖_二互指_一、理必咸通。」とあり、理が通じることを用いて、久遠実成は三身についても言えることを説く。

(8) 本門の十妙 『法華玄義』卷七上。大正三三・七六五頁上。既出。

(9) 僂妙を判ずる中に云うが如し 『法華玄義』卷七下。大正三三・七七〇頁中。『法華玄義』卷七上（大正三三・七六五頁上）では、本門十妙を十重（略釈・生起次第・明本迹開合・引文証成・広解・三世料簡・論僂妙・結成権実・利益・観心）に解釈している。この箇所は、第七「論僂妙」の冒頭にあたる。

(10) 籤の一 『法華玄義積籤』卷一。大正三三・八一七頁中下。

(11) 又 『法華玄義積籤』卷一。大正三三・八一八頁中。

(12) 籤の一 『法華玄義積籤』卷一。大正三三・八一七頁下。

(13) 又 『法華玄義積籤』卷一。大正三三・八一七頁下。

(14) 玄文の第一 『法華玄義』卷一上(大正三三・六八二頁中下)の取意。原文は、「善・惡、凡・聖、菩薩・仏、一切不_レ出_レ法性。正指_レ実相_レ以為_レ正体也。故寿量品云、不_レ如_レ三界見_レ於_レ三界。非_レ如_レ非_レ異。若三界人見_レ三界_レ為_レ異、二乘人見_レ三界_レ為_レ如、菩薩人見_レ三界_レ亦如亦異、仏見_レ三界_レ非如非異。双照_レ如異。今取_レ仏所見_レ為_レ実相正体也。」とある。ここに見る通り、『法華玄義』では、『法華經』如来寿量品(大正九・四二頁下)を引用して実相の正体の証としている。

(15) 籤 『法華玄義積籤』卷一。大正三三・八二〇頁下。

(16) 異 天台大師全集本では「真」となっているが、底本並びに版本では「異」となっている。

(17) 記の十 『法華文句記』卷一〇中。大正三四・三四四頁中。既出。『法華文句』卷一〇上(大正三四・一三八頁中)の「順_レ理者、聞_レ仏本地深遠深遠、信順不_レ逆。無_レ一毫之疑滯。」についての註釈。この『文句』に見られる「深遠深遠」について、道暹撰『法華經文句輔正記』卷一〇(続藏一―四五・一六三丁右上)では、「疏深遠深遠者、実証尚過_レ塵点_レ故云_レ深遠深遠。又深者指_レ迹門_レ実理_レ也。遠者本成時_レ遠也。」と、湛然の「理深時遠」を迹門の諸法実相の理・本門の久遠実成の時という観点から解釈している。

(18) 若し二門く因果等と云うや これは、迹門の十妙(『法華玄義』卷二上。大正三三・六九七頁中)では最初に境・智の二妙を立てるが、本門の十妙では智・境を立てず、因・果を立てていることについての言及である。

(19) 籤の一 『法華玄義積籤』卷一。大正三三・八一六頁中。ここでは、「初釈_レ妙者、但_レ拳_レ不思議_レ則已簡_レ於_レ可思議_レ也。彼止觀_レ為_レ成_レ觀故乃以_レ相待_レ為_レ可思議_レ。唯一絶待_レ為_レ不思議_レ妙_レ。今則不_レ爾。円中

約レ時待絶俱妙。余味約レ部或妙或僂。若前三教時之与レ部一向為レ僂。至法華被レ開方稱為レ妙。止觀相待義似ニ於別ニ故判為レ僂。今此妙名兼ニ於本迹。彼文妙觀独在ニ於円。」とあり、「彼文」は『摩訶止觀』を指すことが分かる。証真は、この引用部について、『玄義私記』卷一本（仏全二二・三頁上下）で「問。若於レ修ニ法華三昧觀者、応レ觀ニ乗作仏及久遠成仏。若觀ニ実相者、与他経円觀ニ有ニ何不同。答。言ニ実相ニ者、即是ニ乗同歸之処及久遠所証之理也。故觀ニ実相ニ即觀ニ法華。……若円觀者、円実不異故、安樂行明ニ觀法ニ云ニ空如実相、寿命品云ニ非レ如非レ異。本迹実理、同明ニ一実。即指ニ実相ニ以為レ経体。」と、実相を觀ずることにより、同時に久遠所証の理、本迹の実理をも觀ずると説いている。

四破引大日疏証者、

彼疏本地身者、指事久成非本覺也。故金剛頂疏云、遮那経云、我昔坐道場、阿闍梨云、法華久成是経毘盧舍那。阿闍梨云者、引不空説也。教時義云、如大日経、諸仏菩薩証入大日身中、還從本所通達門出、真如一体。天台本迹釈与今宗因分久近意同。故大日疏云、此経本地之身、是法華最深秘処。觀心釈与今宗果分一体意同。故大日疏云、釈尊久成寿命皆在一念中。云。其大日者、即是因円果滿、非自覺仏。如金剛頂疏。自余諸文準例可知。

四に大日疏を引きて証となすを破すとは、

彼の疏の本地の身は、事の久成を指して本覺には非ず。故に金剛頂疏〔一〕に云く、遮那経に云く、我昔坐道場、

と。阿闍梨の云く、法華の久成は是の經の毘盧舍那なり、と。阿闍梨がとは是れ不空の語を引くなり 教時義(2)に云く、大日經の如きは、諸仏菩薩、大日の身中に証入し、還りて本の通達する所の門(3)従り出でて、真如一体なり。天台の本迹積は今宗の因分久近と意同なり。故に大日の疏(3)に云く、此の經の本地の身は、是れ法華の最深秘処なり。觀心積は今宗の果分一体と意同なり。故に大日の疏(3)に云く、釈尊の久成の寿命は皆、一念中に在り、と(4)。其の大日とは、即ち是れ因円果滿にして、自覺仏に非ざるなり。金剛頂疏の如し。自余の諸文の例に準じて知るべし。

(1) 金剛頂疏 『金剛頂經疏』卷三。大正六一・三九頁中。既出。これについての註は、破異義の第一説・法身為本を参照。

(2) 教時義 『教時問答』卷一。大正七五・三八四頁中。次項参照。

(3) 本の通達する所の門 『大日經』及び『大日經義積』(『大日經疏』)には、「本所通達門」という語は見られない。「本所通達門」という語は、安然の著作に散見される。安然『菩提心義抄』卷一(大正七五・四七七頁中)には、「問、何以得知皆引入耶。答、大日經義積説、諸仏各從本所通達門ト出ト現五乘形、各説五乘三味道皆引入曼荼羅、並開心実相門ト一生成仏ト」取意とあり、曼荼羅諸尊が各々本来(仏に)通達する門より出て、五乗の形をとつて衆生を教化し曼荼羅に引入し、併せて衆生の心の実相を開示して、一生に成仏すると説く。この取意文は、『大日經義積』卷五(統天全、密教1・一七一頁上〜一七九頁上)、『大日經疏』卷六、七・大正三九・六四六頁上〜六四九頁上)の五種三味道に関する記述に依拠している。『大日

經義釈』卷五（統天全、密教1・一七一頁上下。『大日經疏』卷六、大正三九・六四六頁上）には、「經本第二卷初云爾時毘盧遮那世尊、与一切諸仏同共集会、各各宣說一切声聞・縁覚・菩薩三味道者。如来已說究竟三空三昧印、為令普門進趣者無留難故復說三味道中差別印。三重漫茶羅所示種種類形、皆是如来一種法門身。是故悉名為仏。此等一切諸仏、各於本所流通法門、自說彼三味道。若現世天身者、則說彼天三味道。若現声聞身者、則說声聞三味道。若現辟支仏身者、則說辟支仏三味道。若現菩薩身者、則說菩薩三味道。若現持金剛身者、則說金剛三味道。」とある。三重漫茶羅の種類の類形は大日如来の法門身であり、仏であり、その漫茶羅の一切諸仏は本所流通の法門において、普門進趣の者のために五種の三味道を説くと言う。文意を勘案するに、安然が「本所通達門」としているのは、この「本所流通法門」であると思われる。また、五種三味道に関する記述の総結（『大日經義釈』卷五。統天全、密教1・一七九頁上。『大日經疏』卷七、大正三九・六四九頁上）において、「就此經宗、則五種三昧皆是開心実相門。如行者初住有相瑜伽、則是世間三昧。但於此中了知唯蘊無我、即是声聞三昧。若以十縁生句觀諸蘊無性無生、即是菩薩三昧。余如住心中廣明。不問余教以心性之旨未明故五乘殊輒不相融會也。若更作深秘密釈者、如三重漫茶羅中五位三昧、皆是毘盧遮那秘密加持。其与相應者皆可一生成仏。」とある。安然の取意は、これらの記述を基になされていると思われる。

(4) 大日の疏
『大日經義釈』卷五。統天全、密教1・二〇二頁上下。『大日經疏』卷七、大正三九・六五八頁上。

(5) 大日の疏
『大日經義釈』卷三（統天全、密教1・九〇頁上。『大日經疏』卷三、大正三九・六一三

頁上)には、「復次衆生一念心中、有 如来寿量長遠之身・寂光海会。乃至不退諸菩薩、亦復不能知。當知此法倍復難信。故法華中、補処三請如来四誠、然後演說。今此經、具有修入方便。乃至一生可成。若能諦受不疑、到於信地、或度於信解、乃名深行阿闍梨也。」とあり、この安然の記述はここに依るものと思われる。既出。

【二八五頁下・一二行〜二八八頁下・一二行 担当 柳澤正志】

第三説云、本門別明無作三身。不同迹門及他經説。即説証得無作三身名為本門。故新成仏、亦説此身為顕本也。故寿量品輔正記云、一身即三身名為秘者、一身即三身、法華之前未曾説。故名為秘。三身即一身、以本証得衆所不知故、名為密也。じ下 既云前未曾説。又云本証衆所不知。故知、本門三身永異諸經也。

第三の説①に云く、本門には別して無作の三身②を明かす。迹門及び他經の説に同じからず。即ち証得の無作三身を説くを名けて本門と為す。故に新成の仏、亦、此の身を説くを顕本と為すなり。故に寿量品の輔正記③に云く、一身即三身を名けて秘と為すとは、一身即三身は、法華の前に未だ曾て説かず。故に名けて秘と為す。三身即一身は、本証得、衆の知らざる所なるを以ての故に、名けて密と為すなり、と。じ上 既に前未曾説と云う。又、本証衆所不知と云う。故に知んぬ、本門の三身、永く諸經に異なるなり。

(1) 第三の説　破異義の第三。第三説は、道暹撰『法華經文句輔正記』寿量品の「秘密」の釈を根拠に、本門には、迹門や諸経とは異なる別の無作三身が明かされる、と主張するものであり、証真は以下この第三説を破す。この第三節の主張者が具体的に誰を指すかは不詳である。

(2) 無作の三身　無作とは、天台の円教の意を示す語である。『法華玄義』卷二下（大正三三・七〇〇頁下）七〇一頁上）に、「四種四諦者、一生滅、二無生滅、三無量、四無作。其義出涅槃聖行品。」とあるように、天台における常套句である。また、無作と三身を結びつけたのは、最澄が『守護国界章』卷下之中（伝全二・五六七頁）に、「有為報仏、夢裏権果、無作三身、覚前実仏。」と記したのが最初である。なお、「覚前実仏」の語の解釈は、「覚る前の仏」が妥当だが、「覚つてから前（＝覚つた後）」とする異説もある。以上のことについては、花野充道「最澄における無作三身義の考察」（『東洋の思想と宗教』一一、一九九五）、浅井円道（『上古日本天台本門思想史』、平楽寺書店、一九七三。一一一頁〜一一五頁）等、参照。

(3) 寿量品の輔正記　『輔正記』卷九。続藏一―四五・一五四丁左下。原文は、「疏、一身即三身者、即一身即三身。法華之前未會説故名為秘。三身即一身、以本証得衆所不知故、名為密也。」とある。『法華文句』卷九下（大正三四・一二九頁下）の「秘密者、一身即三身名為秘。三身即一身名為密。」の釈に該当する。

弾曰、一家章疏、都無本迹三身不同之文義。故寿量品疏、雖釈三身、但以久近為本迹異。不分本迹三身不同。

彼疏云、發迹顯本三如来者永異諸經。言永異者、是以久証、為永異耳。不言三身相不同也。故玄文云、迹中十妙、不異本妙。而言始得。始得為僞、先得稱妙⁴。歷一切法、皆、云本迹雖殊不思議一也。若云本門三身異者、異相如何。若云本覺為異等者、亦如前破。輔正記文意云、從本垂迹名一身即三身。故未曾說。會迹歸本名三身即一身。故衆不知。即此本迹唯在本門。故云不說。非謂三身相不同也。若実異者、何故、寿命品記、指彼秘密三身相即、通諸味耶。而輔正記、三身相即唯在本者、彼摠秘密即神通。故彼疏次積云、又昔所不說名為秘、唯仏自知名為密。暹師依次積意、消三身即一也。具見彼疏記。

弾じて曰く、一家の章疏に、都て本迹の三身不同の文義無し。故に寿命品の疏¹に、三身を積すと雖も、但、久近を以て本迹の異と為す。本迹の三身の不同を分たず。彼の疏²に云く、發迹顯本三如来とは、永く諸經に異なる、と。永く異なると言うは、是れ久証を以て、永異と為すのみ。三身の相不同と言わざるなり。故に玄文³に云く、迹中の十妙、本妙に異ならず。而して始得と言う。始得を僞と為し、先得を妙と稱す、と云⁴。一切の法に歴て、皆、本迹殊なりと雖も不思議一なり、と云うなり。若し本門三身の異と云わば、異の相如何。若し本覺を異と為す等と云うは、亦た前に破するが如し。輔正記の文⁵の意に云く、從本垂迹を一身即三身と名く。故に未だ曾て説かず。會迹歸本を三身即一身と名く。故に衆は知らず、と。即ち此の本迹は、唯、本門に在り。故に不説と云う。三身の相不同と謂うには非ざるなり。若し實に異ならば、何が故に、寿命品の記⁶に、彼の秘密の三身の相即を指して、諸味に通ずるや。而して輔正記⁷に、三身の相即、唯、本に在りとは、彼は秘密即神通に摠る。故に彼の疏⁸の次に積して云く、又、昔説かざる所を名けて秘と為

し、唯、仏自ら知るを名けて密と為す、と。暹師は次の釈の意に依て、三身即一を消すなり。具には彼の疏の記⁽⁹⁾を見よ。

(1) 寿命品の疏 『法華文句』卷九下。大正三四・一二九頁上中。「此品詮量、通明三身。若從別意、正在報身、何以故。義便・文會。義便者、報身智恵、上冥下契三身宛足、故言義便。文會者、我成仏已來、甚大久遠故、能三世利益衆生。所成即法身、能成即報身、法・報合故、能益利物、故言文會。以此推之、正意是論報身仏功德也。復次如是三身種種功德、悉是本時道場樹下、先久成就、名之為本。中間今日寂滅道場所成就者、名之為迹。諸經所說本迹者、即寂滅道場所成法報為本。從本所起勝劣兩應為迹。今經所明、取寂場及中間所成三身、皆名為寂。取本昔道場所得三身、名之為本。故与諸經為異也。非本無以垂迹。非迹無以顯本。本迹雖殊不思議一也。」とある箇所に基づく。証真は、この箇所には三身が積されているが、久・近の違いを本迹の違いとしており、本門・迹門の三身の違いを述べているのではないとする。

(2) 彼の疏 『法華文句』卷九下。大正三四・一二八頁中。「發迹顯本三如来者、永異諸經。」とあるによる。この記述も、三身の違いは久証かどうかによるもので、結局久・近の違いを述べているのであり、本門の三身が迹門の三身と異なることを述べているのではないとする。

(3) 玄文 『法華玄義』卷七下、十重に本門の十妙を積する中、第七に僂妙を論ずる条(大正三三・七七〇頁中)に、「第七判僂妙者、若迹中已得十僂為僂、十妙為妙。未開十僂為僂、開十成妙。具如前

説。迹中、若待_レ僂妙、若開_レ僂妙、此妙不_レ異本妙。而言始得、始得為_レ僂。本中先成、若僂、若妙、若開僂妙、亦不_レ異迹妙。而是先得、先得稱_レ妙。又迹中事理始得為_レ僂、本中事理先得為_レ妙。」とある記述に基づく。

(4) 一切の法に歴て、皆本迹殊なりと雖も不思議一なり 『法華玄義』卷七上、本門の十妙を明かす条(大正三三・七六四頁中〜七六五頁上)に基づく。既出。

(5) 輔正記の文 『輔正記』卷九。続蔵一―四五・一五四丁左下。既出。輔正記の文意は、従本垂迹を一身即三身、会迹帰本を三身即一身とし、この本迹は本門に至つて説かれることから秘密であると積することであり、本・迹の三身の相が異なることを述べているのではない、と会釈している。

(6) 寿量品の記 『法華文句記』卷九下(大正三四・三三三頁上中)の取意。原文は、「一身即三身等者、文中二解、各有其意。初積約三身法体・法爾相即。次積約今昔相望。以今法体望昔故也。亦可前積通諸味後積斥他經。唯在今經故也。即秘密家之神通。故還約三身以積。故知、神通力言隨於諸教教主故也。故広約諸味簡已、更約今昔簡之、方顯本地三身神通。若積小乘及以漸教、則不_レ得_レ以此中三身積_レ之。」とある。

(7) 輔正記 『輔正記』卷九。続蔵一―四五・一五四丁左下。既出。

(8) 彼の疏 『法華文句』卷九下(大正三四・一二九頁下)に、「秘密者、一身即三身、名為_レ秘。三身即一身、名為_レ密。又昔所_レ不_レ説、名為_レ秘。唯仏自知、名為_レ密。」とある。ここでは、『輔正記』の説が、三身相即は諸味に通ずとする『文句記』(註6)の記述と相違するのは、道暹が『文句』の「又昔所_レ不_レ説、

名為「秘」。唯仏自知名為「密。」という部分（『文句記』のいう「次釈」、「後釈」）に依拠しているからであるとしている。

(9) 彼の疏の記 三身相即に関する議論の詳細について、『法華疏私記』卷九末（仏全二二・七二〇頁下）七二一頁上を参照するよう指示しているものと思われる。そこでは、『文句記』と『輔正記』の説の相違について、「此約「秘密即神通」也。謂他經不説「從本垂迹一身即三身」。今經方明「會迹歸本三身即一身」也。」（同・七二一頁上）としている。

或云、玄文云、問。破十龜頭十妙、即無明惑尽、一実理彰。今更破迹為龜、頭本為妙、破何惑頭何理。答。無明重数甚多、実相海深無量。如此、破頭無咎。（下）此明本仏尽無明源、迹仏望之猶未_レ尽也。（下）

或が云く、玄文^{（一）}に云く、問う。十龜を破して十妙を頭さば、即ち無明の惑尽き、一実の理彰わる。今更に迹を破するを龜と為し、本を頭すを妙と為さば、何の惑を破し、何の理を頭すや。答う。無明の重数甚だ多く、実相の海深きこと無量なり。此の如く、破頭すること咎無し、と。（下）此れ本仏は無明の源を尽くし、迹仏は之に望むるに、猶未だ_レ尽くさざること_レを明かすなり、と。（下）

(一) 玄文 『法華玄義』卷七下。大正三三・七七〇頁上。原文は、「今更破迹妙為龜頭本為妙。」

とあるが、『私記』では「迹妙」が「迹」となっている。ここでは、『法華玄義』の文に拠り、本仏と迹仏の相違は無明を断尽しているか否かにあるとし、本・迹の違いを、第三説とは異なる角度から主張している。

弾曰、円教本明四十二品。本仏更断何等無明。又玄文明本迹不同云、法身先満、無増無減化縁論広狭耳。又明本果中、斥迹門果、但有三義。一始成故、二浅深不同故、三弘中間故。不云迹仏不尽無明。而無明重数尽多等者、此明所化。非教主也。問意云、迹門開籠顕妙之時、始入初住。無明已断、実理已顕。今至本門、破何等惑、更増道耶。所言無明惑尽者、是分尽耳。此問答者、是明迹門十妙之外、更立本門十妙之益也。如玄文云。若論実道得益、兩処不殊。而権智事用、不得相比。カ。迹門得道止齊無生法忍、本門得道齊余一生在更有異説。不足述破。

弾じて曰く、円教は本と四十二品を明かす。本仏更に何等の無明を断ずるや。又、玄文①に本迹の不同を明かして云く、法身先に満ち、無増無減にして化縁に広狭を論ずるのみ、と。又、本果を明かす中に、迹門の果を斥するに、但、三義有り。一には始成の故に、二には浅深不同なるが故に、三には中間を払うが故に、と。迹仏無明を尽さずと云わず。而して無明重数甚多等とは、此れは所化を明かす。教主に非ざるなり。問②の意に云く、迹門の開籠顕妙の時、始めて初住に入る。無明已に断じ、実理已に顕る。今本門に至りて、何

等の惑を破して、更に増道するや。言う所の無明惑尽とは、是れ分に尽くすのみ。此の問答は、是れ迹門の十妙の外に、更に本門の十妙の益を立つることを明かすなり。玄文に云うが如し。若し実道の得益を論ずるは、両処殊ならず。而して権智の事用、相い比ずることを得ず。乃至、迹門の得道は止だ無生法忍に斉り、本門の得道は余一生在に斉る、と^三云^五。更に異説有り。述破するに足らず。

(1) 玄文 『法華玄義』卷七下。大正三三・七六八頁中。「問。迹本相望、千界塵則少、増道數則多。本迹法身、淺深異耶。答。法身先滿、無_レ増無_レ減。約_二化緣_一広狭耳。問。若爾、初住・二住化緣多少、法身亦_レ應_レ無_レ淺深。答。菩薩位未_レ窮、約_二実証_一判_二淺深_一。仏位已滿、但約_二權化_一、有_二四句_一論_二広狭_一云。」とある箇所に基づく。

(2) 又 『法華玄義』卷七上。大正三三・七六六頁下、七六七頁上。「有_二三義_一故、知_レ此諸果皆是迹果。一。今世始成故、二。淺深不同故、三。弘_二中間_一故。若是本果、何得_レ今日始成。本果一果一切果。何得_レ前後差別不同。自_レ從今世之前本成之後、百千万億行_レ因得_レ果、唱_レ生唱_レ滅、悉是中間、弘_レ為_レ方便。寂滅樹王、何得_レ非迹。若執_レ迹果_レ為_レ本果者、斯不_レ知_レ迹、亦不_レ識_レ本。從_レ本垂_レ迹、如_レ月現_レ水。弘_レ迹顯_レ本、如_レ撥影指_レ天。當_レ撥_レ始成之果皆迹果、指_レ久成之果是本果也。」という記述に基づく。証真は、これら二文を根拠として、本迹の不同が、無明を断じ尽くしているか否かにかかるものではないとする。「或云」が引用する『法華玄義』の文に「無明重數甚多」等という記述があるとしても、これはあくまでも「所化」につ

いて述べているのであって、ここで問題としている「教主」について述べたものではない、と反駁する。

(3) 問 『法華玄義』卷七下。大正三三・七七〇頁上。既出。「或云」の主張の根拠。

(4) 迹門の得道は余一生成に齊る 『法華玄義』卷七下、十重に本門の十妙を積する中、第九の利益を論ずる条(大正三三・七七〇頁下、七七二頁上)で、「第九利益者、前明生身益、次明法身益、生身兩處得_レ益。……故分別功德品云、仏説_二希有法_一、昔所_レ未_レ曾聞。世尊有_二大力_一、壽命不_レ可_レ量。説_レ得_レ法利者_ト、歡喜充_二遍身_一。或住_二不退地_一、或得_二陀羅尼_一。即是生_・法_二身得_レ益之相。若論_二実道得_レ益_一、兩處不_レ殊。而權智事用不_レ得_レ相比_一。喻如_二慧解脱_・俱解脱無漏_一、不二而功德優劣。前迹門得道、止齊_二無生法忍_一、本門得道、齊_二余一生成_一、以_レ塵為_レ數。多少深淺、豈同_二於前_一。當_レ揀_二彼文_一。從_レ發心處、即是六根淨位、乃至一生成、即是最後分身_{云々}。」とあるによる。湛然が『法華玄義積籤』卷一五(大正三三・九二五頁下)で、「本門法身、迹門生身、兩處得_レ益、所証_二円理無_レ深淺_一。故曰_二不_レ殊_一。」と釈するように、所証の理については本迹二門に相違はないが、仏の化用に優劣があることから、迹門の得道は無生法忍(初住)に限るとし、本門の得道は、余一生成(一生補處)の等覺の菩薩とする。証真は、この記述を根拠として、「或云」が引用する『法華玄義』の文意が、迹門の十妙の他に本門の十妙の得益を明かすにあることを論証しているのである。

【二八八頁下・一二行〜二八九頁下・一一行 担当 渡辺麻里子・松本知己】

主要参考文献目録

一、証真の事蹟・教学に関する研究

【単行本】

- 大久保良峻『天台教学と本覚思想』（法蔵館、一九九八）
同『台密教学の研究』（法蔵館、二〇〇四）
佐藤哲英『続・天台大師の研究』（百華苑、一九八一）
平井俊榮『法華文句の成立に関する研究』（春秋社、一九八五）

【論文】

- 浅田正博「宝地房証真における天台教判の理解」（『龍谷大学仏教文化研究所紀要』一七、一九七八）
池田慧水「宝地房の私記に顕はれたる書目」（『四明余霞』二五八、一九〇七）
大久保良峻「一生入妙覚について―証真を中心に―」（『天台教学と本覚思想』所収）
同「証真の即身成仏論」（『天台教学と本覚思想』所収）
同「証真教学における教主義と法身説法思想」（『天台教学と本覚思想』所収）

- 同「良源撰『被接義私記』について」(『天台教学と本覚思想』所収)
- 同「日本天台における被接説の展開―基本的事項を中心に―」(『天台教学と本覚思想』所収)
- 同「日本天台における法身説法思想」(『台密教学の研究』所収)
- 久保正三「宝地房証真の史的研究」(『立正大学論叢』創刊号、一九四二)
- 坂本幸男「法華仏教の特質―特に法華至上思想の展開―」(『中世法華仏教の展開』平楽寺書店、一九七四)
- 『大乘仏教の研究』大東出版社、一九八〇)
- 佐藤哲英・小寺文穎・源弘之・福原隆善「宝地房証真の共同研究」(『印度学仏教学研究』十八―二、一九七〇)
- 同「宝地房証真の共同研究(二)」(『印度学仏教学研究』十九―一、一九七二)
- 佐藤哲英「宝地房証真のみた幻の円頓止観」(『続・天台大師の研究』所収)
- 同「四十二字門」(『続・天台大師の研究』所収)
- 多賀宗準「宝地房証真について」(『戦乱と人物』吉川弘文館、一九六八)
- 瀧川善海「宝地房証真の生没年について」(『天台学報』二四、一九八二)
- 同「証真伝に於ける法然の存在」(『印度学仏教学研究』三一―一、一九八二)
- 同「宝地房証真の史的考察」(『天台学論集』一、一九八四)
- 同「鎌倉以降に於ける証真教学依用の形態」(『大正大学大学院研究論集』八、一九八四)
- 同「『二百題』を媒介とした証真教学と靈空教学に関する試論」(『天台学報』二六、一九八四)

利根川浩行「宝地房証真と円戒」(『天台学报』三一、一九八九)

納富常天「鎌倉仏教における最澄」(天台学会編『伝教大師研究』別巻、早稲田大学出版部、一九八〇)

廣川堯敏「宝地房証真撰『観経疏私記』と良忠」(『天台思想と東アジア文化の研究』山喜房仏書林、一九九

一)

三崎良周「教時間答と天台真言二宗同異章」(『台密の理論と実践』創文社、一九九四)

二、顕本論及び本覚思想関連

【単行本】

浅井円道編『本覚思想の源流と展開』(平楽寺書店、一九九一)

多田厚隆・大久保良順・田村芳朗・浅井円道編『天台本覚論』(岩波書店、一九七三)

田村芳朗『本覚思想論』(春秋社、一九九〇)

裕慈弘『日本仏教の開展とその基調』(下)(三省堂、一九五三)

【論文】

遠藤是妙「中古天台の顕本論」(『大崎学报』一六、一九一一)

大久保良峻「本覚思想―天台教学の日本的展開―」(『天台教学と本覚思想』所収)

- 同「現実肯定思想―本覚思想と台密教学―」（『天台教学と本覚思想』所収）
- 同「三密行について」（『台密教学の研究』所収）
- 同「天台本覚論―証真説に着目して―」（『院政期文化論集』巻四・「宗教と表象」所収、二〇〇四）
- 大久保良順「七箇大事における四句成道について」（『天台学报』一六、一九七四）
- 庵谷行亨「宝地房証真の本覚思想批判」（『本覚思想の源流と展開』所収）
- 北川前肇「新成顕本論をめぐる問題―寿量顕本解釈の一断面―」（『大崎学报』一三四、一九八二）
- 坂本幸男「中国における『法華経』研究史の研究」（『法華経の中国的展開』平楽寺書店、一九七二↓『大乘
 仏教の研究』）
- 佐々木俊道「証真の本覚法門批判に関する一考察」（『曹洞宗研究員研究紀要』二〇、一九八八）
- 清水龍山「寿量顕本論」其一〜三（『大崎学报』五〜七、一九〇六〜一九〇七↓『清水龍山著作集』第二卷、
 東方出版、一九七九）
- 末木文美士「天台本覚思想研究の諸問題」（『日本仏教思想史論考』大蔵出版、一九九三）
- 武覚超「宝地房証真の本迹論」（『天台学报』二五、一九八三）
- 田村芳朗「本覚思想に対する批判論」（『印度学仏教学研究』二一一、一九七三↓『本覚思想論』）
- 同「天台本覚思想概説」（『天台本覚論』所収）
- 花野充昭「日本中古天台文献の考察（一）―無作三身思想の成立と三十四箇事書の撰者について―」（『印度
 学仏教学研究』二四―一、一九七五）

- 花野充道「本覚思想と本迹思想―本覚思想批判に依えて―」(『駒澤短期大学仏教論集』九、二〇〇三)
- 三崎良周「五大院安然と本覚讚」(『台密の理論と実践』創文社、一九九四)
- 同「五大院安然における秘密義」(『台密の研究』創文社、一九八八)
- 水上文義「蓮華三昧経の成立をめぐつて」(『印度学仏教学研究』二八―一、一九七九)
- 同「現行本『蓮華三昧経』の成立について」(『天台学报』二二、一九七九)
- 同「蓮華三昧経(本覚讚)をめぐる一、二の問題」(『天台学报』二二、一九八〇)
- 同「『講演法華義』の検討」(『東洋の思想と宗教』一五、一九九八)
- 望月敏厚「寿量所顕本覚三身論」(一) (二) (三) (『大崎学报』一三―一五、一九一〇)
- 山内舜雄「宝地房証真の本覚法門批判と道元禅」(『道元禅と天台本覚法門』大蔵出版、一九八五)

なお、浅井円道編『本覚思想の源流と展開』の巻末に「本覚思想関連著書論文目録」が、末木文美士「天台本覚思想研究の諸問題」には「天台本覚思想研究書論文目録」が、それぞれ付されている。

【参考文献目録作成 担当 松本知己】